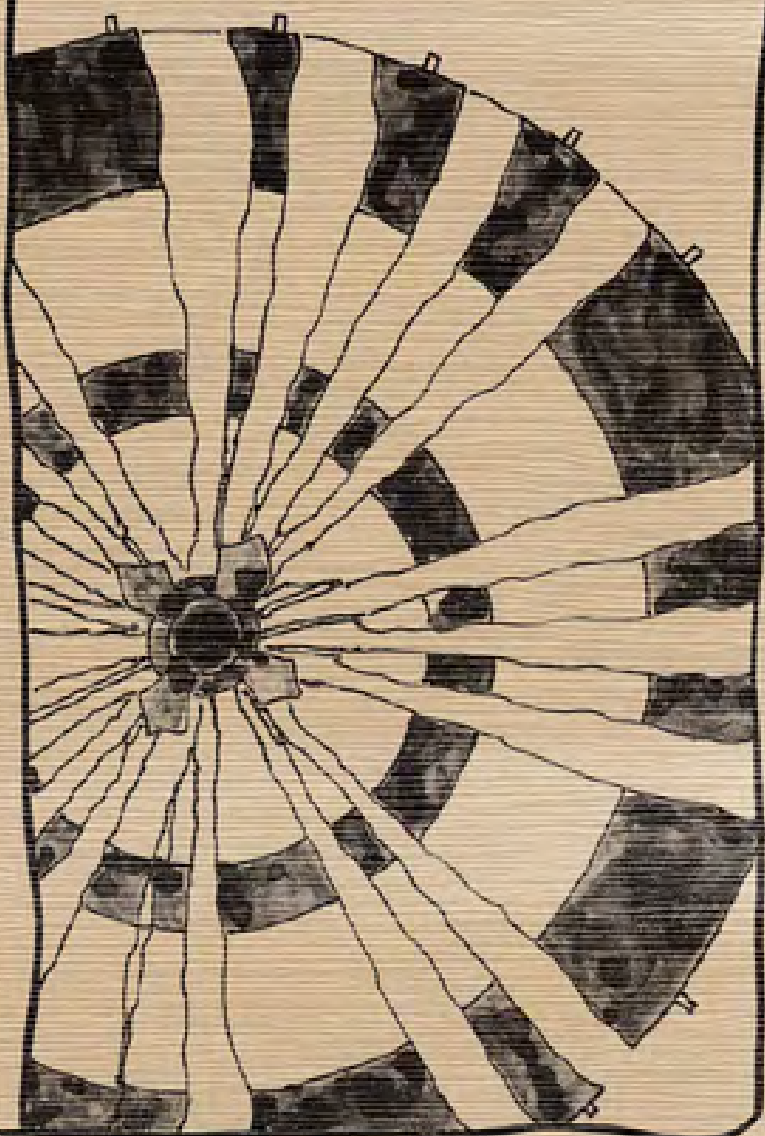


# やぶれ傘



一一一號

二〇一九年十二月

山眠る小学校に大きな木	根橋宏次
一枚の葉もなく柿の実がななつ	大島英昭
一の酉すずめ集まる木が一本	きくちきみえ
二つ目の信号を右おでん屋は	青谷小枝
山門に立て掛けてある熊手かな	廣瀬雅男
日向ほこしつ昼餉のハムサンド	瀬島酒望
こぼこぼと鳴るはおでんの煮えし音	小山よる
牡蠣とワインのあとのデザートそれはもう	丑久保 勲
三十歩枯草原を駆けてみる	藤井美晴
ずずだまがふもとの藪に雑木山	渡邊孝彦
卓上に硝子の林檎時雨来る	安藤久美子
晴天のテレビアンテナ鳴の声	白石正躬
山宿の膳に酢の物濁り酒	天野美登里
銀杏が弾けてゐるよフライパン	有賀昌子
ちよいと汁つけて御岳の走り蕎麦	秋山信行

抄 集 句 傘 紀 ぶ れ や

しほむなよせくな急くなよ朝顔よ	松村光典
間遠なる添水の音や日が暮るる	貫井照子
またひとつ老舗が消える冬隣	野口希代志
記憶力落ちゆくを知る草紅葉	橋本美代
秋西犬に物言ふ郵便夫	広瀬 濟
木犀の香やコンビニの駐車場	村田 武
林間の小径にぼつと曼珠沙華	森 美佐子
うつ伏せに案山子倒れてをりにけり	安齋正藏
下北の土は黒々ごほう掘り	泉 一九
競りおとす鯛を見つめる男の目	稲田延子
みかんもぐ人ゐてふたつもらひけり	倉澤節子
東向いて食べる初物柿甘し	齋藤朋子
勾玉は胎児のかたち冬来る	柴崎和男
来し方も行く末も夢曼珠沙華	竹内文夫
鳴く虫を夜具のぬくみの中に聞く	中島和子

竹林より鳥の声くる彼岸寺  
 大振りの土鍋で炊いて今年米  
 間遠なる添水の音や日が暮る  
 宮居より笙の音きこゆ空高し  
 翅ひろげ秋蝶とまる川原石  
 坪庭に来たる夕暮れ京の秋  
 溪谷の径に走り根水引草

貫井照子

真青なる淵続きをり谿紅葉  
 路地裏に巻かれていたる秋簾  
 もろこしの焦げ目飛び道  
 古民家の隅に鳴きをりちんちろり  
 読書する頭に眼鏡敬老日  
 紅葉の森林軌道跡たどる  
 またひとつ老舗が消える冬隣

野口希代志

萩原 溪人

長雨の過ぎてすぐさま蝉時雨  
白樺の向かう谷川岳の夏  
支へ木を越ゆるトマトの実の熟れて  
どばみみずちよん掛けにして湖に釣る  
腰の鈴鳴らして夏の原生林  
朝市の声の飛び交ふ黄蜀葵  
ヨイトマケの唄流れくる終戦日

萩原 久代

「送ったよ」と孫よりメール敬老日  
会席のつるりと剥ける衣被  
青瓢の葉付きを貰ひ描くところ  
重たげな衣装が歩く秋まつり  
庭の菊手折りて父母の墓へゆく  
街中の竹林百舌の罅らし  
イベントに募金箱置く冬隣

橋本美代

台風過テレビ画面を黙し見る  
天高しクレーン三基が空を突く  
火渡りの炎を煽る秋の風  
品川宿に人の流れる秋祭り  
記憶力落ちゆくを知る草紅葉  
病床の三人見舞ふ石路の花  
冬晴れや孫の婚約整ひて

濱野新

大雨で崩れし崖に烏瓜  
電線の混み合ふ空や鱗雲  
神木の公孫樹一気紅葉す  
焼魚の皿に添へられ紅葉  
会席の締め食事のこ飯  
鳥の巣を枝に残して枯葉散る  
雨上がりが初冠雪の今朝の富士

夕空を我が家のごとく蚊食ひ烏  
村芝居切られ役起き幕閉める  
水桶の豆腐美し秋の朝  
棟上げの白木の香り秋高し  
秋茜犬に物言ふ郵便夫  
秋夕べビルの谷間に占ひ師  
駄菓子屋の土間の凸凹秋入日

廣瀬 新

秋出水親戚よりのたよりなく  
ガタゴトとトラクターバス花野行く  
服に着く虫払ひゆく土手の道  
暴風雨過ぎて静かに鱚雲  
初紅葉森の向うはビルの街  
去年より今年のは疲れ菊まつり  
明るきは木立のなかの石路の花

本郷美代子

太鼓橋登れば近き秋の雲  
秋寒の木曾の寢床に川のこゑ  
雁渡る日の出の近き遊水池  
増水の跡ある土手に秋の蝶  
十一月の跡ある谷間に雲垂れて  
宿場町に一軒の宿冬ざるる  
妻籠まであと一キロや帰り花

本田武

仏花には白リンドウを求めけり  
此の年は初孫膝に月見酒  
秋入り日は同窓会の帰り道  
四代が集ひて祝ふ敬老日  
メキシコ松茸炙り独り酒  
秋の昼今年二度目の火葬場  
生垣の隙間を抜けて秋の風

増田裕司

上弦の月や大文字消えかかる  
五重塔のぞむ茶店の冷やしあめ  
中天に名月厨に起きし時  
あわび蒸す昔海女だといふ女将  
神田には茶店が似合ふ蔦紅葉  
「管理地」の看板古び猫じゃらし  
金木犀道に洩れくるテレビ音

松本善一

茶屋の影映して静か秋の池  
台風の過ぎてひとときは青き空  
天高し濠の向うに姫路城  
ほつこりと故郷の味栗御飯  
渡月橋を渡る人びと秋深し  
行く秋の原爆ドーム壁白し  
小六月富士山頂は雪化粧

箕田健生



武藤節子

秋の暮どこかの猫が庭通る  
久々に長皿を出し初さんま  
月を待つ縁側の無き家に住み  
秋の暮鏡に顔を置き忘れ  
霧晴れて草木に日矢のいくすぢも  
秋の蝶風に遅れて漂へり  
体調を取り戻したる今朝の冬

村田武

コンビニの灯の煌々と夜の長し  
木の犀の香やコンビニの駐車場  
秋の雨川の流れの濁りたる  
日の暮れを飛び交ふ尾長柿熟る  
直売所青首大根山と積み  
校庭の東の銀杏散りにけり  
日短か茜に染まる西の空

突堤の先に灯台秋夕焼  
林間の小径にぽつと曼珠沙華  
一夜城の野面石積みうろこ雲  
岩に乗り甲羅干す亀秋の昼  
切株に育つ楮の初紅葉  
隣家より挽ぎたての柿貰ひけり  
暮の秋協正面で能を観る

森美佐子

寄せ墓の辺りに咲いて彼岸花  
窓を打つ雨を見に立つ颱風裡  
赤とんぼ草の葉ゆらし止まりゐる  
鳥渡る高層ビルの上を  
固まつてがやがや通る夜学生  
鴨の数かぞへてをれば鯉がはね  
冬の近し暮れ行くいろを映す川

山本久枝

湯本正友

蘆原をゆく木道に雨は降り  
雨けぶる稲田を前に無人駅  
稲実る畦道沼で突き当たり  
茅葺の館の垣は萩の叢  
朝寒や目ざましの鳴る窓のそば  
土手脇の小ながれに雑魚竹の春  
雨続く刈田を鷺が歩きゐる

湯本実

菜園が農家の庭に赤とんぼ  
敬老会傘立てに杖あふれをり  
磴ゆけけば十六羅漢初紅葉  
尻赤き秋の蚊叩き潰しけり  
山紅葉ダムのは放流見てすごす  
菊人形展老人会の人にごふ  
紅葉の脇道通り児童館

吉田幸恵

子規読みて気付けば釣瓶落としか  
女郎花ちよつと斜めに活けてみる  
団栗の跳ねて転がる石畳  
コスモスの倒れてもなほ咲き続く  
お遍路を待つ接待所冬近し  
柿つるす緑の屋根の保育園  
箱車で園児お散歩秋うらら

浅嶋肇

秋彼岸集合場所は父母の墓  
商店街抜けて畑道ちちろ鳴く  
ポケットの無患子ころと鳴りにけり  
掌にそつと受けたる熟柿かな  
繕ひが趣味と言ふ妻秋深し  
烏賊釣り舟出てゆく釣瓶落しかな  
水引草を本に挿みて閉ぢにけり